

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵

佐藤忠重(ただしげ) 西澤國護 豊田穰(ゆたか) 長谷見敏(びん)

古田昇 星田啓子 山崎亜也

投句・選句 伊賀山そらお 熊谷國男(くにお↓表記は「く」) 小早健介 朱牟田静雄(恵洲)

高橋康敏 土谷堂哉 中川雅夫 福島正明 山田啓子(けい子) 山内天牛

渡邊盛雄

投句のみ

宮内規雄 梅崎哲雄(くすを↓表記は「くす」・新人) 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子

橋口隆 早川允章 古川百合子(新人) 山本三恵

【互選句】

十一点◎火の散華奈良に居座る余寒あり 盛雄 (そ・紀・くす・孤・く・堂・康・昇・啓・百・け)

十点 野焼の火風を孕みて咆哮す 孤舟 (紀・健・康・堂・雅・允・百・〇亜・三・天)

九点 ◎薄氷(うすらひ)をつい割ってみる陽さしかな 亜也 (紀・孤・と・〇千・孝・恵・た・び・盛)

八点 ◎永き日を船ゆつたりと軋み合う びん (〇そ・紀・忠・〇孤・く・清・百・天)
野仏は伏し目がちなり余寒かな けい子 (紀・くす・五・た・孝・雅・百・盛)

七点 露天風呂類に春風目には富士 堂哉 (紀・〇くす・忠・千・ゆ・昇・〇盛)

六点 春潮を零し活魚の運搬車 孤舟 (紀・く・康・〇堂・〇啓・〇百)
木の芽和よそふ小鉢を決めてをり とみ子 (紀・くす・千・恵・清・堂)
武蔵野の名残とどめて霜柱 國護 (紀・く・と・た・け・天)

五点 春疾風さつそうバイクの若き僧 健介 (そ・紀・龍・け・盛)
春泥に草鞋はくとや丹波牛 とみ子 (紀・五・啓・百・〇三)
◎涅槃図の末席の象鼻を上ぐ 全 (紀・孤・五・恵・三)
◎重なりて盛上がる絵馬梅日和 康敏 (紀・孤・と・恵・び)
初音聞く法然院の方丈に 全 (紀・〇健・龍・國・び)
故郷の梅咲く便り帰心湧く ゆたか (紀・孝・堂・國・昇)
春めきて改札口に待ち合はす 昇 (紀・〇孝・隆・允・け)
◎菜の花の揚げられてなほほろ苦し 啓子 (紀・孤・清・ゆ・亜)
◎いっときを樹々に化粧す春の雪 全 (孤・〇た・清・國・び)

四点 縄跳びが出来て孫にも春來たる 忠彦 (紀・五・清・雅)
冬深し老舗雑誌も休止とか 千恵 (紀・健・恵・龍)
マクベスに魔女の甘言春隣 五郎太 (紀・千・昇・啓)

公園に幼児の声や梅香る
今年こそコロナ退治と鬼やらひ
節分や逢魔が時のおにはそと

正明 (紀・た)
昇 (紀・雅)
啓子 (紀・三)

一点

転ばぬよう達磨見ならふ梅見坂
春旅や秘湯巡りの待ち遠し
恵方巻食べて明日の春を待つ
砕氷船船先は未来へと向かふ
喉越しの白魚の味問はれても
甘夏の黄色に浮かぶ南の地
この星に八十億も寒に入る
愛の日やチョコはもはや吾のため
氷筍の透き通つたる寒さかな
鹿猪美味熊狸不味菓喰ひ
中断のままの家普請(やぶしん)冬どるる
霏霏として幹に張り付く春の雪
雪の街破壊哀しや無残なり
庭に積む初雪眺めつ酒を酌む
春立つや句題求めてぶら歩き
百年の家毀されつ花の中
護摩を焚き健康祈る初不動
流鏑馬の馬場は田中や梅二月
友を待ち冬枯れ庭に温(ぬく)さがす
芝に雪ページをめくり赤ワイン
合格に祝いを何に老夫婦
暖炉には匂い漂うシチュー鍋
騒々し暮るる上野の冬鶉
梅の花やわらかく風吹きにけり
蒸うにの罐は大枚はたく価値
わらび餅カロリー調べて購へり
行く人へ標は清か遍路道
要支援要介護の会春に入る

紀久男 (盛)
全 (國)
忠彦 (紀)
孤舟 (健)
全 (垂)
五郎太 (紀)
千恵 (紀)
全 (紀)
ただしげ (紀)
恵洲 (紀)
全 (紀)
くにお (紀)
ゆたか (紀)
全 (紀)
全 (紀)
全 (紀)
びん (紀)
ただしげ (紀)
くにお (紀)
雅夫 (紀)
國護 (紀)
全 (紀)
全 (紀)
全 (紀)
びん (紀)
規雄 (紀)
亜也 (紀)
全 (紀)
盛雄 (紀)
天牛 (紀)



【句評】

十一一点句 ◎火の散華奈良に居座る余寒あり

盛雄

孤舟さん・・・東大寺のお水取りが行われる夜は、まさに寒気が足元から這い上がる感じ。

くにおさん・・・東大寺二月堂での修二会の一つ「お水取」の景だと思う。修二会の行の庄巻は夜更けてからの「籠松明」と「お水取」。その「籠松明」を「火の散華」とし、季語のお水取を奈良の「余寒」として一句を詠んだ。面白い句だと思う。

康敏さん・・・東大寺二月堂、大松明を振り回し火の粉が群衆に降ってくる。火事にならな

いかりスキーな祭りだ。この頃は寒いことが多い。「お水取りが終わらへんと、ほんまの春は来いへん」

堂哉さん・・・お水取りの行事のことでしょうか、関西ではこれが済むと春がきます。
紀久男・・・大阪の独身時代会社帰りに奈良へ行き底冷えで震えながら焚火で暖をとり夜更かしたことがあります。激しい「達陀」の行は見応えがありました。

十点句

野焼の火風を孕みて咆哮す 孤舟

康敏さん・・・擬人法が成功する例は少ないが、当句には迫力を、むしろ恐怖さえ感じる。

野焼は森林火災や大気汚染のリスクにより禁止だが、宗教的理由などあれば許可される。参考『野焼の火炎となりて風に乗り 西村和江』

堂哉さん・・・淀川の川原の蓍を焼くのを見に行きました。正に火が一気に吠えて怖かったです！

天牛さん・・・火勢が強くなるとこわくなることがあります。

九点句

◎薄氷（うすらひ）をつい割ってみる陽ざしかな 亜也

孤舟さん・・・氷になりたての水の幕たる薄氷。子供に帰ってちよつと苛めてみたくなる。

恵洲さん・・・薄氷（うすらい）って見ると何故か割ってみたくなりますよね。日差しが暖かく感じられる気分の良い日はなおさら。

ただしげさん・・・薄く張った氷をいたずら気分で傘の先でつついて割ってみる。なんとなく春の訪れを感じさせる。

八点句

◎永き日を船ゆつたりと軋み合う

びん

孤舟さん・・・のどかな麗らかな春の日を浴びて、係留の綱がゆつたりと伸び縮み軋む。くにおさん・・・いかにも春ののんびりとした一日の感じが出ているように思える。

天牛さん・・・ゆつたりと軋むがいいですね。

野仏は伏し目がちなり余寒かな けい子

五郎太さん・・・風雨にさらされた野仏、初めからであろうが薄く刻んだ目は少し下を見ている。余寒との取り合わせが良い。

ただしげさん・・・野の仏様が風雨にさらされ、お顔がはっきりしなくなったのを伏し目がちと上手く表現している。

七点句

露天風呂類に春風目には富士

堂哉

盛雄さん・・・伊豆の温泉郷でしょうか。中七の「類に春風」が心地よい一句に仕上げました。羨ましい佳句。

六点句

春潮を零し活魚の運搬車

孤舟

くにおさん・・・見過ごしてしまい勝ちの景をよく捉えていると。春潮が効いている。
康敏さん・・・活気が交錯する魚河岸での写生句。「春潮を零し」の大胆な表現に詩的効果を感じます。

堂哉さん・・・特選、活気を感じました。季語が良いですね！妹が中央市場の魚屋に嫁いだので、長年美味しい魚介類を食べさせて頂きましたが、最近は値段が高くなり驚いています。

啓子さん・・・活魚を運ぶ特殊車両から水が滴り落ちている。そう、それは春の海の水！

春の陽が零れる水と魚の鱗をキラキラさせている感じがして美しい。
木の芽和よそふ小鉢を決めてをり とみ子

恵洲さん……久しぶりの春の味覚を味わえる心のはずみ。この味覚に相応しい食器を選ぶのも楽しい。

堂哉さん……いかにも食通らしい、男料理の人を想像しました。さて、酒は？

武蔵野の名残とどめて霜柱 國護

くにおさん……朝日の中で、繊細に輝く霜柱の美しさが目に浮かぶ。自然主義の独歩の『武蔵野』が思い出される。

とみ子さん……霜柱は、都内では見なくなりました。中七が、よろしいと思います。

ただしげさん……武蔵野の面影を残すところで霜柱を見つけ、かつての武蔵野の風情が感じられる。

天牛さん……学生時代東松原の叔母の家の庭によく出かけました。当時そう寒いとは思いませんでした。

五点句 春疾風さつそうバイクの若き僧 健介

盛雄さん……お彼岸のお坊さんは忙しい。疾風のごとく走り行く。

春泥に草鞋はくとや丹波牛 とみ子

五郎太さん……私は戦争末期に京都の丹波で育ちました。ここは今でも松茸や黒豆など、美味しいものを大切に育て、京や全国に供給しています。牛も愛情を持って育てられるのでしょうか。

三恵さん……牛が草履をはくという光景は、現実の牛の役務なのか、なにかのメタファーなのか存じ上げないのですが、なぜか不思議な光景が目に浮かびました。作者の方はきつと。幅広い題材に造詣が深くていらっしゃるのですね。

◎涅槃図の末席の象鼻を上ぐ とみ子

孤舟さん……釈迦入滅に悲しむ在俗の人々、諸菩薩、鳥獣のなか、象だけが鼻を持ち上げて弔意を表しているのだろう。

恵洲さん……涅槃の釈迦を悲しみ、送る動物たちの末席に象が小さくなって？かしこまっているユーモラスな姿か。

◎重なりて盛上がる絵馬梅日和 康敏

孤舟さん……湯島天神の合格祈願の絵馬は夥しい数吊るされている。

恵洲さん……湯島天神か、大宰府か。合格祈願の絵馬が重なって盛り上がるまでに。受験シーン真つ盛りながら梅匂う早春の景色。

初音聞く法然院の方丈に 康敏

健介さん……鄙びた山門の法然院に魅かれています、初音が聞けるとは何とも羨ましい。

故郷の梅咲く便り帰心湧く ゆたか

堂哉さん……暫く帰っていないのですね。梅の香りと共に、あの頃のことなどが、次々と浮かんできます。便りは何方からでしょうか？

春めきて改札口に待ち合はす 昇

孝岳さん……春の到来と共に草木、風、陽の光、人の様子まで全てのものが生き生きと感ぜられて浮き浮きと外へ出て無性に人に会いたくなる様子が良く表現されています。
隆さん……津軽鉄道線、芦野公園駅。久留米餅のモンペの娘が両手に荷物。口に挟んだ切符に改札の美少年駅員が缺を入れるシーンが「津軽」（太宰治）にある。改札を通過

する客も春の装い。

◎菜の花の揚げられてなほほろ苦し

啓子

孤舟さん・・・菜の花はどう調理されても本来のほの苦さは失われない。

◎いつときを樹々に化粧す春の雪

啓子

孤舟さん・・・春の淡雪ゆえ、一瞬木々を彩るが、瞬く間に消え失せてしまう。

ただしげさん・・・木々に薄つすらと積る雪を、化粧する様子に見立てていて面白い。

四点句

縄跳びが出来て孫にも春來たる

忠彦

※※康敏さん・・・縄跳びができるようになったお孫さんを褒める句。「縄跳」は冬の季語ですが、「春來たる」が明らかに主季語なので、季重なりは問題無いと思います。なお、当句会では孫を詠んだ句が散見されます。可愛いので当然のことでしょうが、多くの入門書に孫の句は作るなどあります。「孫」の名句なしとも言われます。べた可愛がりでは詩的昇華は期待出来ないとのことが理由です。

冬深し老舗雑誌も休止とか

千恵

恵洲さん・・・これも、出版不況のなせるワザか。愛読してきた良い雑誌の休刊の方に寒さがひとしお沁みる。冬深しにこもる実感。

マクベスに魔女の甘言春隣

五郎太

啓子さん・・・シェイクスピア劇をご覧になったのですね。魔女の予言の場面が印象的でしたか、雰囲気のあるこの季語を良く合わせられたなあと思いました。

湖の果て比良の残雪夕陽中

堂哉

くにおさん・・・琵琶湖の西、比良山の残雪が夕日に映えている。美しい句である。「比良の暮雪」は近江八景の一つ。

恵洲さん・・・琵琶湖から残雪の山々を望む雄大な景色が目には浮かぶ、良い写生句。

康敏さん・・・近江八景の「比良の暮雪」に春の訪れ。三段切れ気味なのが気になるが。

老いてなほチョコ待つブレントインの日

昇

堂哉さん・・・今年はいくつききましたか？現役時代はギリチョコでもやはり嬉しく、家に持ち帰っていました。

路地裏の一隅照らす犬ふぐり

昇

天牛さん・・・路地裏の一隅でなくても犬ふぐりは美しい。

春うららパンケーキ屋に列長し

啓子

くにおさん・・・店の中から焼きたてのパンの香りと明るい春日の中で順番を待つ長い人の列。きっと、人気のパンケーキ屋のだろう。春の気分がよく出ている。

正明さん・・・女性の方の句、と了解しました。本当に「春うらら」の光景でホッと思いました。

天牛さん・・・アメリカに頻繁に旅に出た頃、朝のホテルのパンケーキにまさる朝食はありませんでした。

◎芝の上にかぎろひ立てる陽ざしかな

亜也

孤舟さん・・・早春の天気と光の様子が的確に捉えられている。

春告魚寄す江差余市は群来とかや

亜也

恵洲さん・・・鯉の群来が久方ぶりに北海道に見られたのか。本当ならソーラン節を地で行く朗報。

◎昨今の鬼は強盗豆を撒く

忠彦

孤舟さん・・・最近の凶悪犯罪をうまく風刺している。

初雪や消えても喜び残りけり

忠彦

龍平さん・・・忘れずに一旦は舞い降りて下さったかと感銘

※※康敏さん・・・「や」「けり」と切字の併用はタブーです。中七の字余りも避けねば。

また、上五に「初雪や」と切字を使うなら、中七・下五は初雪と違う内容にして、取合わせの句にするべきでしょう。例えば『初雪や仏と少し昼の酒 星野椿』

心中はあつさり演ず春芝居

五郎太

隆さん・・・心中、身投げは美を高める。観劇者には肩透かしだったか。

「心中はさらりと過ぎし春芝居」でも。

紀久男・・・江戸の心中ものは確かにこの通り。上方は浄瑠璃から取ったものなのでこてこてとしつこい。あつさりとは、あくまでも江戸の心中ものです。

春たちぬインド更紗の紅き縞

五郎太

康敏さん・・・生命力の根源とされるインド更紗の赤と、幾多の生命が生まれる春との調

和の妙。

春なのにギプスに自由を奪われて

千恵

とみ子さん・・・おげがにも拘らず句会に出席された精神力がこの句からうかがえます。

厄落とし大きな声で「鬼は外」

ただしげ

隆さん・・・厄落としの必死さ。「」はなくても。

晴れわたる立春の空スノームーン

ただしげ

龍平さん・・・二月の満月ですか。寒空に何とも言えない爽快さ

梅咲いて皆口々に兜太の句

康敏

昇さん・・・一読、金子兜太の代表句「梅咲いて庭中に青鯨が来ている」を想起しま

した。梅と青鯨の取り合わせの発想が凄い。ぎらぎらとした生命力を感じます。とても凡人には理解不能。でもそこが魅力で何故か引き込まれます。幻の光景に感応するざわめきが聞こえてくるようです。

◎校庭の声が聞こえる雪合戦

國護

孤舟さん・・・普段はめったに雪を見ない都会の学童には先日淡雪は神からの授かりもの

だったに違いない。

鴟忌(かもめき)や鉄鎖に舫ふ氷川丸

びん

けい子さん・・・鴟忌が三好達治の命日とは知りませんでした。私は金澤なので三国には縁があり三好達治の詩集など読んだなあと雪深い北陸の日々を思い出しました。

奥深く隠されたもの残り雪

正明

とみ子さん・・・意味深長なことがあるのでしょうか。そのままにしておきたいですね。

足を棒目を皿にして探梅行

昇

隆さん・・・目に青葉山ほととぎす初鯉に似たアイデアか。

麗かや母の寝顔に笑み浮かぶ

啓子

とみ子さん・・・その時の子としての嬉しさが、伝わってまいります。

紀久男・・・介護されている母上の満足されている寝顔の表情が的確に表現されています。

亡き妻の生まれ変わりや梅の花

規雄

隆さん・・・輪廻転生。開花している梅に出会った喜びか。

初午や鳥居の赤の鮮やかさ

けい子

天牛さん・・・メーカー社長時代、初午を大事にしました。

春光や女医とアランを語り合ふ

天牛

五郎太さん・・・アランは19世紀から20世紀にかけてのフランスの哲学者のペンネーム、長くりセの教師でもあった。多分「幸福論」のことを若い女医さんと話していたのだろう。「悲観主義は気分、楽観主義は意志」とも言っている。春光が効いている。

昭和から非戦のさげび菜の花忌

盛雄

隆さん・・・近年、世間に物申す大人がめつきり減った。司馬遼太郎の一声は世の中を変えそう。「非戦のさげび」↓「非戦をさげぶ」ではいかが。

ただしげさん・・・昭和の時代から続いてきた非戦の誓いが今は怪しくなってきた。

紀久男・・・利休の忌日としての菜の花忌は旧暦2月8日。司馬遼太郎の忌日の菜の花忌は未だ正式には季語になっていないのではないのでしょうか・・・。

※※五郎太さん・・・侘茶の世界を作り、秀吉に命じられ自害した千利休の忌日（現在では3月28日）には利休を偲び茶室に菜の花を挿します。この日は昔から「菜の花忌」と呼ばれています。最近ではこの花が好きだった司馬遼太郎の忌日（2月12日）も菜の花忌というようですが、新しい季語として定着させるのにはいささか抵抗があります。

二点句

宿酔を醒ますボルシチ蜆汁

紀久男

盛雄さん・・・二日酔いに蜆汁は定番なれどロシアのスープも一役担うとは・・・

紀久男（自解）・・・大阪時代に堺筋の明治屋で昼食。二日酔に良く効くのです。ボルシチは元来ウクライナ発祥の料理です。

春なれや虎狂（とらきち） 一家の血が騒ぐ 紀久男

龍平さん・・・15年ぶり監督岡田に「ソリヤソウヨ」ダカラ ダカラ」の連発はもう無しです。何を言わんとするかよう解りますが・・・そこで、

⇨負け出すと夏虎騒動甲子園

1984年弊社社長の新婚祝を大阪玉造の新居にお届けに行った時はまたピカピカの純心若虎でした。

允章さん・・・もうすぐプロ野球が始まる。一家そろってのタイガースファン、さぞかし待ち遠しく血が騒ぐことだろう。我が家では関西出身の妻がファンクラブに入っている。

雀隠れ仔犬は鎖外されて

孤舟

康敏さん・・・「雀隠れ」という珍しい季語と、鎖を外され嬉しくて跳ね回る仔犬との対比が面白い。

公園に幼児の声や梅香る

正明

ただしげさん・・・公園から今まで聞こえなかった幼子の声が聞こえ始め、春の訪れを上手く表現している。

一点句

転ばぬよう達磨見ならふ梅見坂

紀久男

盛雄さん・・・ダルマを見ならうとは愉快ですな。今回のユニーク賞に推薦致します。梅見坂がこの句を引締めました。

氷筍の透き通つたる寒さかな

ただしげ

紀久男・・・季重りですが捨てがたい。

庭に積む初雪眺めつ酒を酌む

ゆたか

※※孤舟さん・・・助詞「つ」(完了)と「つ」(反復、継続、同時性)は別物で、「つ」を省略

して「つ」で代用することは出来ません。 ↓ 初雪ながめつつ (9音) 或いは「つ」を外

し ↓ 「初雪眺め」(7音)でも「初雪を眺めながら」という意は伝わると思っています。

芝に雪ページをめくり赤ワイン

國護

紀久男・・・芝居やオペラをTVで鑑賞しながら純米酒やコニヤックを呑むときは至福の刻です。

流鏑馬の馬場は田中や梅二月

くにお

紀久男・・・「田中や」は、田んぼの中という意味とします。現地を見ないと分からない方々も居られると思いますので、「田んぼ」とされたら如何でしょうか。

友を待ち冬枯れ庭に温(ぬく)さがす

雅夫

紀久男・・・季重りですが捨てがたい。



【次回青葉会予定】

令和五年三月二十三日(木)

時間：十三時～十六時半

会場：三軒茶屋 しやれなあと(世田谷区施設) 4階会議室

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。

前回の事前㊦入力による清記、句会当日には、入力原稿の確認後、すぐに選句にかかる方法が時間的な余裕が生まれて良かったとの感想をいただき、このまま句会日に先立ち、**参加者の出句予定句及び投句を当方に頂戴しての句会開催と致します。**

締切：三月二十一日(火)中。

出句・投句は今井宛FAX、或いは星田メール或いはFAX(03-3421-9772)宛頂戴できれば事前に清記に反映致します。

尚、当日ご出席の方で、しやれなあどの場所が初めてのかたは、星田までお電話を頂戴出来ればご説明致します。田園都市線三軒茶屋の駅出口は北口左階段ですが、そこからお電話いただければお迎えに上がります。遠慮なくお申し越してくださいませ。

☆三茶しやれなあと所在地 東京都世田谷区太子堂2-16-7 **宝くじ売り場が目印のビル**

☆星田携帯電話 080-8870-8201



青葉会報

一、今回は孤舟選者以下日頃は投句に甘んじておられた昇さんの出席も見て13名の参加。最長老の天牛さん等による12名の会員からの投句、全93句にての句会となりました。句会前に啓子さんが出句一覧を作成、当日参加者には現地にて配布、出句について確認後、たっぷり時間をとつての選句、その後の各人の発表という段取りと相成りました。いつもの五郎太さんの見事な捌き役で、孤舟さん、盛雄さん、亜也さん、びんさん、けい子さんが好成績でした。

今回は新たに参加された方がお二方居られ、まずは選句からのご参加でした。くすを（梅崎哲雄）さん、百合子（古川百合子）さんで、このお二方は昭和44年丸紅入社です。今後はお出席、ご投句と期待しております。

小生は寄贈（万里子先生は「差し入れ」という言葉は刑務所で使う言葉であるから一般には使わないと厳格でした）の純米大吟醸「加賀鳶」（金澤）、「菊水の辛口」（新発田）、大吟醸幻の瀧（黒部）、蓬萊（飛騨高山）に、とみ子さん、亜也さん、啓子さん等からの銘菓やおつまみを堪能、酩酊状態で居眠り。おかげで、丸紅と伊藤忠の日経新聞見開き二頁全面広告を持参したものの回覧して話題にすることを失念するというお恥ずかしい次第でした。

二、関係者近詠

マスク裡に讚美歌ハミング介護中	眞希子	防空壕掘って置かねば十二月	陽亮
らふそくのみ新調疫下のクリスマス	全	妻の病の原因（もと）は吾にと塞ぐ冬	全
立替への端数は献金石路の花	全	大マスクけふ三日目の無精髭	全
旅の扉に「信濃毎日」雪の朝	弘子	鬱病を疑うてゐる十二月	全
諏訪の空きりと引きて鷹一姿	全	まだ青きまま実千両たわわなり	紀久男
御柱の曳き跡著し冬紅葉	全	芝居はね元炭団屋の居酒屋に	全
旧道の布団屋赤いちちゃんちゃんこ	全	柚子湯浴び放心してる夕餉かな	全
きよろんと鳴る眠り人形室の花	全		

——以上「森の座」三月号（横澤放川 選）——

初旅の大きな夢に無人島	盛雄	振袖の乙女に囲まれ初電車	健介
自分史の新たなページ八十の春	全	初飛行単身生活へ戻り行く	全
心友千草捷氏への追悼三句	全	おらが村の冬の星座は日本一	全
難聴の友の急逝山眠る	全	寄席はねて花びら餅を手みやげに	紀久男
前夜まで妻との対話三日逝く	全	快癒して自ら祝ふ爛の酒	全
雲上のテニスコートへ旅立ちぬ	全	妻誘ひ天神御供（こく）に絵馬納め	全

（大阪時代庄司さん含めテニス仲間でした。
ハンブルグ支店長就任の送別テニスを
アンツーカーの西宮甲東荘コート↓宝塚荘へ。
忘れられない思い出です。紀久男記）

——以上「きさらぎ句会」二月——

孤舟選者近詠

紅葉散る譜面の音符散ることく
上州の風に締まりて懸大根
落葉降るひとりで臨む死のやうに
紺碧を一刀断ちに鷹飛翔
冬落暉扇畳みに山暮るる

令和五年三月十二日

紀久男記

